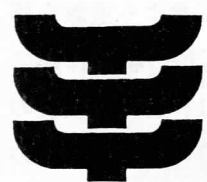


平成7年3月31日



米沢市文化財年報 No. 8

文化財愛護シンボルマーク

米沢市教育委員会



空からみた上杉家墓所 (おたまや 御霊屋)

史跡 米沢藩主上杉家墓所保存修理工事

上杉家墓（廟）所は、東西に歴代藩主の廟屋が一線に並んで建てられているところで、中央より西側の高さ約1.1メートルの石垣の壇上には、東より初代景勝・3代綱勝・5代吉憲・7代宗房・9代治憲（鷹山）・11代齊定の順に奇数代の藩主の廟屋が並んでいる。

治憲廟と齊定廟の間に奥まった所に、顕孝（治憲子、治広養子）の廟屋が建てられている。

中央より東側の石垣上には、西より2代定勝・4代綱憲・6代宗憲・8代重定・10代治広の順に偶数代の藩主の廟屋が並んでいる。

各廟屋はほぼ同じ規模・様式であるが、時代が下るにつれて少しずつ小ぶりになる。廟屋の屋根は、7代宗房までが入母屋造、8代重定以降は宝形造である。各廟とも、廟内に五輪塔が据えられており、廟内四周壁には、五輪の塔婆49本が列べられている。各廟の南正面には現在簡単な門が造られている。明治9年10月、新たに景勝廟と定勝廟の間の奥まった所に上杉謙信の廟屋を造り、それまでの景勝廟を中心にした構えに改めたのに伴って参道も改造し、また、拝殿も取り除かれた。

謙信廟は、米沢城本丸東南隅の祠堂より遺骸を移したもので、高さ1.7メートルの石垣の壇上に建てられている。米沢藩主上杉家墓所は、若干の改変のあとが見られているとはいえ、江戸時代大名墓所の代表的なものであり、大名の墓制を研究する上で欠くことのできないものであることなどから、昭和59年1月11日、国の史跡に指定されている。

上杉家墓所内にある廟屋の建造は、上杉謙信廟を除く12棟がいずれも江戸時代であり、また第二次大戦後は十分な維持のための修復が行われなかったために、屋根・土台・床等に著しい破損を生じ、虫・蟻害も各所に発生しており、特に九代治憲廟の銅板葺の屋根は、杉の小枝等の落下物や積雪時の損傷によって破損がひどく宝珠露盤周辺からの雨水の侵入は、内部天井板の腐朽の原因となっている。

このことをうけて、平成5年度は、修復へ向けて綿密な調査を行い、平成6年度より2ヶ年計画で文化庁、山形県教育庁、(財)文化財建造物保存技術協会、所有者（上杉家）などの協力を得ながら本格的な修復工事に着手したところである。



歴代藩主の墓（廟）



9代治憲・世子顕孝廟

谷地河原堤防（直江石堤）発掘調査

〈史跡の概要〉

直江石堤は、直江兼続によって松川の氾濫防止政策として慶長年間に施工されたといわれている。石

堤は、河川の流路にそって石積を主体に構築したものであり、氾濫の危険状況に応じた工法を駆使し、無段、二段、三段と行っている。

米沢藩の記録によれば、寛政10年（1798）『東河

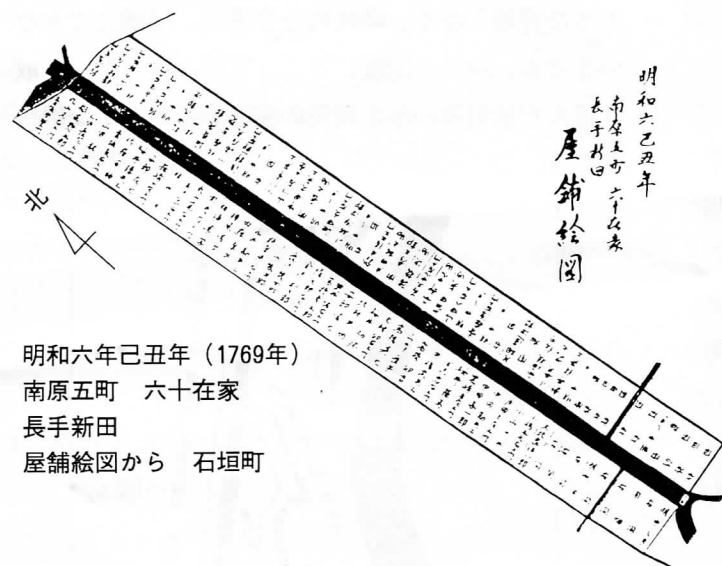
旧武家屋敷群保存活用調査

＝南原石垣町を中心として＝

米沢市の南部に位置する南原地区は、芳泉町、石垣町など旧武家屋敷の遺構がよく保全され、歴史的な町並み景観の雰囲気がいまに伝えている所である。

この地区は、上杉景勝が会津若松から米沢に移封された際、城下に収容しきれない藩士を住まわせるため、原野を開拓し茅葺き屋根の家屋とともに道路沿いには、石垣やうこぎなどの生け垣を設け、半農半士の生活をしたところで、それらの住まいは原方屋敷といわれていた。

近年、生活環境の変化に伴い、改築、改造の動きや周辺地域の宅地開発が進み始めている現状をとらえ、旧武家住宅成立の歴史的背景と現在の保存状態を調査をおこない、保全活用や歴史的町並み景観を活かした「まちづくり」を検討する資料の作成を目的として、調査委員会を組織するとともに地域の方々の協力を得ながら、平成6年度より2年計画で財団法人「日本ナショナルトラスト」に委託し実施している。



旧武家屋敷（石垣町）

一ノ坂遺跡第8次調査概要

本遺跡は米沢市矢来一丁目の、市立緑ヶ丘保育園の南方部に位置している。この遺跡は平成元年度、宅地造成に伴う調査として実施したものであるが、この調査によって、全長43.5mの大型住居跡が発見され、その後、今年度に至るまで6年間に亘って周辺の調査を行ってきたところである。

この間に出土した遺物は約140万点にもものほり、大半は大型住居跡からのものであった。この様なことから、この大型住居跡は縄文時代前期初頭（約6,000年前）の石器製作工房であることが明らかとなった。図1が一ノ坂遺跡遺構全体図であるが、南東方向の破線で示した個所が今年度の調査実施の場所であり、今年度をもって、発掘調査は終了した。

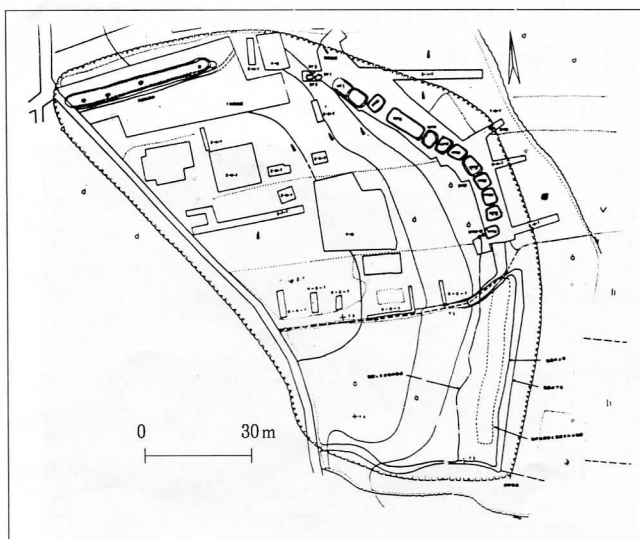


図1 一ノ坂遺跡遺構全体図

図2に示したのが、6年間に亘る調査によって、明らかになったこの遺跡の遺構から当時を想定して描いた集落の様子である。

本調査事業を終了するにあたり、御協力いただいた地権者の方々を始め、文化庁、県教育庁、関係各位に対し心からお礼申し上げます。

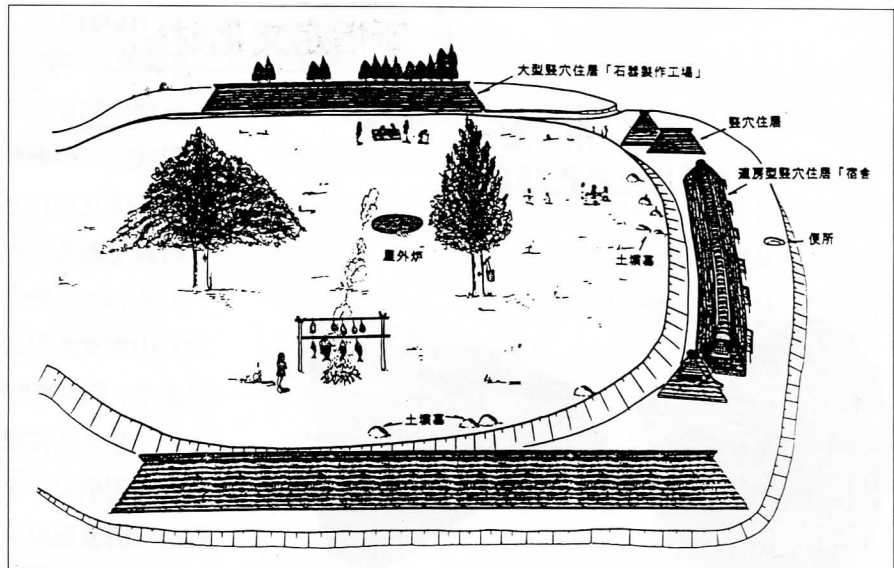


図2 一ノ坂遺跡集落想定全体図

矢子山城跡調査概要

本遺跡は、市西部の成島丘陵石切山、山頂一帯に位置している。石切山の名前が示す通り、昭和30年頃まで石切が行なわれてきたようで、そのため、山の様相がだいぶ変容したものと考えられる。

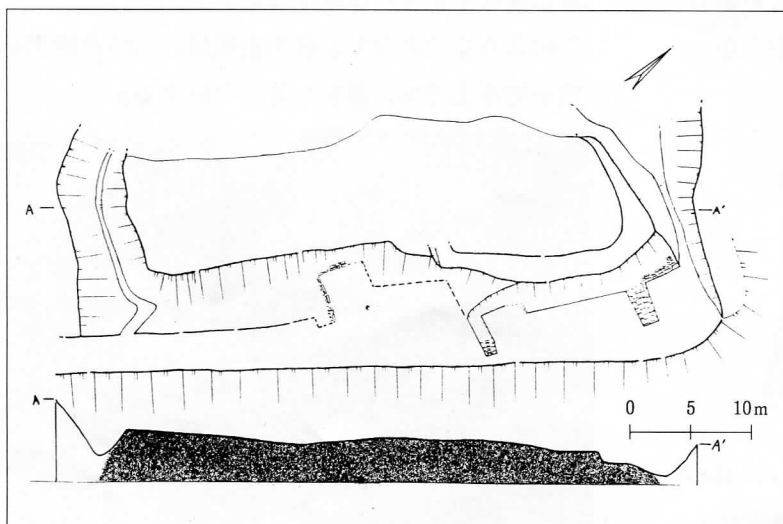
「越後国瀬波郡絵図」によると山を削り、城を築くやり方が初期の城の姿として描かれていることから、矢子山城跡もこのような山城を築こうとして、何んらかの理由により途中で断念したものと推測される。

付近には、多くの石垣や堀がみられ、詳細調査は今後に待たれるところであるが、復元想定図に示し

たように、石切りの際の搬出道路と山城と思われる道路とが同じ位置関係にあることが判明している。

しかし、誰が、いつ頃、どういう目的をもって築城しようとしたのかが明らかにできなかったことは、年代を示す遺物が一点も出土していないことからもうかがえる。

石垣構築の年代は、慶長年頃の米沢における上杉氏時代と考えられ、石切工人が構築したとの説もあるが、いずれにしても、絵図に見られるような山城をこの石切山に築城しようとしたものと考えられる。



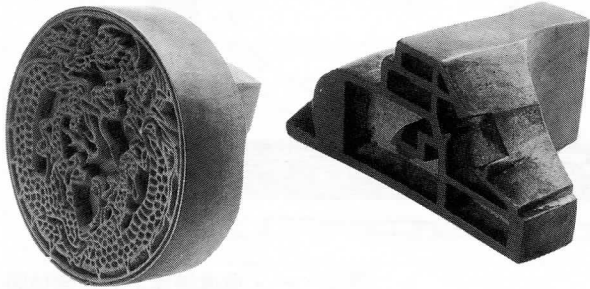
矢子山城路B曲輪復元想定図



越後国瀬波郡絵図

新指定文化財紹介

—国指定— 〈長尾上杉氏印章〉



上杉氏印章

指定年月日：平成6年4月15日

指定の種類：書跡

指定物件名：長尾上杉氏印章

晴景、謙信、景勝所用 27 顆

附 上杉氏歴代藩主印章 61 顆

物件の所在地：米沢市丸の内1丁目3番

指定の理由：戦国大名長尾上杉家の三代が用いた印章の遺品で、上杉謙信、景勝を中心に印章13顆、花押印14顆がある。

附として、上杉氏歴代藩主印章は、二代定勝から十一代斉定までの十一代の各花押印45顆、黒印16顆を有する。

わが国印章の全盛期の戦国大名印判状の遺例は多いが、その使用印章がこのようにまとまっているものは類例がないなどの理由により、国の指定となったものである。

—市指定— 〈長手第1号・第2号古墳〉

指定年月日：平成7年3月1日

指定の種類：史跡

指定物件名：長手第1号・第2号古墳

物件の所在地：米沢市大字長手3789番地

指定の理由：本古墳は、戸塚山の南東1.2kmの通称『城山』と称される標高365mの山頂から張り出した丘陵の南山麓に沿って分布している。

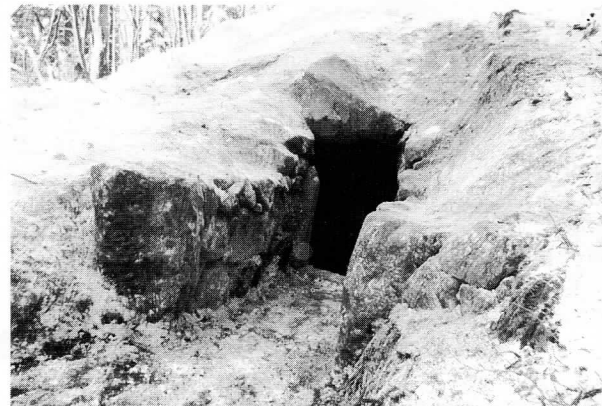
古墳は東側から1号墳から9号墳と9基の古墳群で形成しているが、中世期の山城の構築で破壊され、明確に墳丘が存在するのは第1号墳と第2号墳の2基のみである。

とくに、2号墳は、山麓を削り取って墳丘を構築する山寄せ式型の典型的な横穴式石室の終末期古墳であり、昭和58年に米沢市教育委員会が調査を実施した結果、古墳は直径15m、高さ3.5mの墳丘を有する円墳で、羨道が左右対称の両袖式で玄室の奥壁から前庭部の入口まで5.4mを測る。玄室は、奥壁から玄門にかけてゆるやかな樽形状を示すのが特徴で、凝灰岩の1枚岩を奥壁に置き、側壁は、凝灰岩の割石を下から順に積み上げる持ち送り式で、長さ2.3m、最大幅1.3m、高さ1.8mをなしている。

遺物としては、前庭部より土師器坏4点と鉄鏃1点、それに須恵器坏と須恵器蓋の組合せ1点が出土している。土師器は、内黒を主体とした坏であり、頸部に稜線を有するものが特徴であることから、7世紀末から8世紀前半頃と考えられる。第1号古墳は、保存状況の良好な約7mの小規模な古墳で、2号古墳と隣接しており、2号古墳の被葬者との関連性が指摘される。

置賜地方には、この種の横穴式石室を持つ古墳は、戸塚山古墳群、梨郷古墳群（南陽市）、二色根古墳群（南陽市）、安久津古墳群（高島町）など約400基ほど存在するが、玄室から羨道、前庭部まで明瞭に残存するものは数少ない。

このようなことから、長手古墳は、当時の終末期古墳を知る上でも、重要な遺跡といえる。



第1号古墳

—市指定—
〈木和田窯跡〉



木和田窯跡内部

指定年月日：平成7年3月1日

指定の種類：史跡

指定物件名：木和田窯跡

物件の所在地：米沢市大字木和田764 番地

指定の理由：本窯跡は、三方を山に囲まれた入り江状の山間に位置し、南には県内最古級の木和田館跡、北側の舌状先端部には、木和田窯跡1基と隣接して終末期古墳1基が存在する。

窯跡は、昭和47年にブドウ園造成の際に偶然発見されたもので、同年に置賜考古学会の手によって発掘調査が実施され、須恵器生産窯跡と判明している。窯跡は、丘陵山麓のなだらかな南斜面を利用して構築しているもので、地山の凝灰岩をトンネル式にくり抜いた『無段地下式登窯』に分類される。

窯体は、煙道、焼成部、燃焼部、灰原からなるもので、全長が5.4m、幅1.2mを測る。灰原からは、須恵器の坏、高台坏、蓋、長頸壺などの遺物が検出されており、ことに須恵器の坏の多くは、底部周辺を手持ちヘラケズリ調整を施していることから8世紀前半の遺物と考えられ、現在確認されている県内の須恵器古窯跡としては最古となる。

注目されるのは、この窯から約20mの西側に存在する木和田古墳の副葬品として、木和田窯跡で生産された須恵器の長頸壺が出土していることであり、須恵器窯を管理統轄する責任者の墳墓の可能性が指摘されている。

このようなことから、木和田窯跡は、山形県における須恵器生産の開始を8世紀前半に位置付けるもので、出羽国の登窯の出現期や形態を知る上で、極めて貴重な遺跡といえる。

米沢市立上杉博物館

雲井龍雄生誕150年「幕末と米沢」
と没後20年「狩野文信展」

—郷土の人物を扱った二つの展覧会—

本館は米沢城本丸跡に建っているという立地条件から圧倒的に観光客が多いのであるが、二つの展覧会は郷土の人物とあって、比較的地元の人々が足を運んでくれた展覧会であった。また、「我家にも雲井龍雄の書が、狩野文信の絵があるのだが……」といった情報も多く寄せられた。

雲井龍雄（1844～1870年）は、明治維新の志士で詩人の米沢藩士・本名 小島龍三郎。藩校興讓館に学び、抜群の成績で詩作や文章には天性の才を示した。米沢藩の江戸藩邸警備で江戸在勤の間、安息軒の三計塾に通い時勢に対する目を養っていった。慶応三年藩命により京都に出て多くの志士と交わり、諸藩の内情を探るなど中央の政権闘争の渦中で活躍した。

明治3年4月、新政府に対して陰謀の計画があるとして逮捕され、同年12月26日小伝馬町牢屋敷で斬首、小塚原にさらされた。27才。

彼は、詩人としての才を発揮し、読む人に多くの感動を伝えている。展覧会は彼の足跡を辿るとともに、激動の時代を駆け抜けた米沢藩の人々紹介した。

他方、狩野文信（1890～1975年）は明治23年、川西町（米沢市に隣接）玉庭生まれの画家・本名 川嶋 文。大正四年、狩野探令守純に入門、清貧に甘んじながらも狩野派の伝統をかたくなにまもり、昭和31年、狩野派（鍛冶橋狩野家の流れをくむ）正統を引き継いだ。米沢市大町に画房“大仙洞”をかまえ、山水・神仏画に彩管をふるった。展覧会は、狩野文信が米沢で過ごした中期から後期の作品をとおして、その芸術観・人生観の一端にふれようとするものであった。

報告書紹介

米沢市教育委員会では、埋蔵文化財及び一般文化財を年次毎に調査し、報告書を作成しておりますので紹介します。

〈埋蔵文化財調査報告書〉 欠番は在庫なし

- 『桑山遺跡発掘調査報告書Ⅰ』 第6集 ¥4,000
(水神前・柿の木・ニタ俣B各遺跡)
- 『桑山遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 第8集 ¥4,950
(八幡堂・ニタ俣A各遺跡)
- 『左沢遺跡発掘調査報告書』 第11集 ¥1,500
- 『法将寺遺跡発掘調査報告書』 第12集 ¥1,040
- 『白旗遺跡発掘調査報告書』 第13集 ¥ 500
- 『上浅川遺跡発掘調査報告書第3次』 第15集 ¥6,000
- 『石垣町遺跡発掘調査報告書』 第16集 ¥ 800
- 『桑山遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 第17集 ¥3,700
(大清水遺跡)
- 『大浦A・C遺跡発掘調査報告書』 第18集 ¥1,900
- 『三の丸・生蓮寺遺跡発掘調査報告書』 第19集 ¥1,170
- 『木和田館跡第1次発掘調査報告書』 第20集 ¥ 400
- 『比丘尼平遺跡発掘調査報告書』 第21集 ¥ 950
- 『遺跡詳細分布調査報告書』 第1集 第23集 ¥2,200
- 『遺跡詳細分布調査報告書』 第2集 第25集 ¥1,700
- 『覚範寺第1次・第2次発掘調査報告書』 第26集 ¥1,510
- 『遺跡詳細分布調査報告書』 第3集 第27集 ¥ 510
- 『遺跡詳細分布調査報告書』 第4集 第28集 ¥1,540
- 『遺跡詳細分布調査報告書』 第5集 第32集 ¥1,540
- 『大浦C遺跡発掘調査報告書』 第33集 ¥1,660
- 『上新田A遺跡発掘調査報告書』 第34集 ¥1,300
- 『一の坂遺跡発掘調査概報』 第2集 第35集 ¥ 730
- 『大浦B遺跡発掘調査報告書』 第36集 ¥2,830
- 『遺跡詳細分布調査報告書』 第6集 第37集 ¥1,530
- 『一の坂遺跡発掘調査概報』 第3集 第38集 ¥1,190
- 『上新田A遺跡発掘調査報告書』 第39集 ¥1,530
- 『一の坂遺跡発掘調査概報』 第4集 第40集 ¥ 800
- 『矢子山城跡調査報告書』 第1集 第41集 ¥1,000
- 『遺跡詳細分布調査報告書』 第7集 第42集 ¥1,000
- 『塔ノ原遺跡発掘調査報告書』 第43集 ¥1,200
- 『米沢城跡発掘調査報告書』 第44集 ¥1,300

- 『直江石堤 谷地河原堤防測量調査報告書』 第45集 ¥ 400
- 『窪平遺跡 第Ⅰ次・第Ⅱ次 発掘調査報告書』 第46集 ¥1,300
- 『一の坂遺跡発掘調査概報』 第5集 第47集 刊行予定
- 『矢子山城跡調査報告書』 第2集 第48集 刊行予定
- 『遺跡詳細分布調査報告書』 第8集 第49集 刊行予定
- 『我妻館発掘調査報告書』 第50集 刊行予定
- 『直江堤発掘調査報告書』 第51集 刊行予定

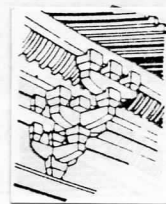
〈一般文化財調査報告書〉 以下在庫なし

- 『米沢の民家』
- 『米沢の仏像』
- 『米沢の神社・小祠・石造物』

表紙の文化財愛護シンボルマークについて

文化財愛護シンボルマークは、文化財愛護運動を全国に押し進めるための旗じるしとして、昭和41年5月に定められたものです。

このシンボルマークは、ひろげた両方の手のひらのパターンによって、日本建築の重要な要素である斗^{とぎょう}椽(組みもの下図参照)のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより、文化財という民族の遺産を過去・現在・未来にわたり永遠に伝承していくという愛護精神を象徴したものです。



発行 米沢市教育委員会
〒992 米沢市金池三丁目1-55
(担当 文化課文化財係)
TEL 0238-22-5111